8：企業と供給PART2

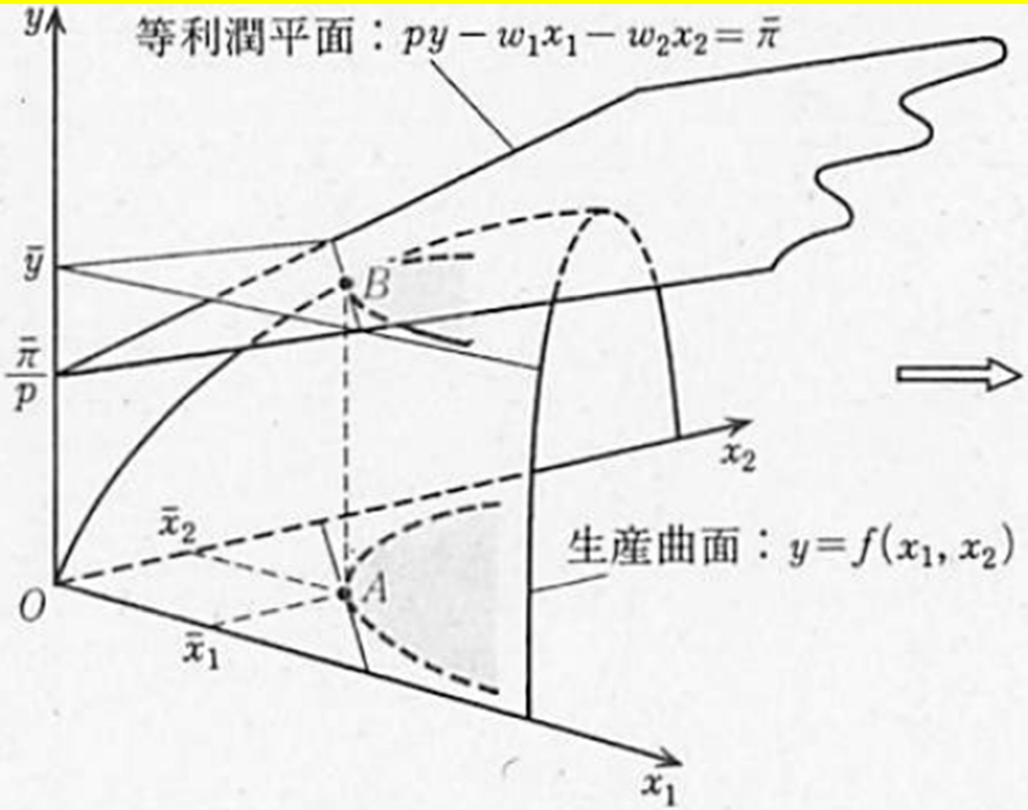
ミクロ経済入門・ミクロ経済学の考え方

赤井伸郎

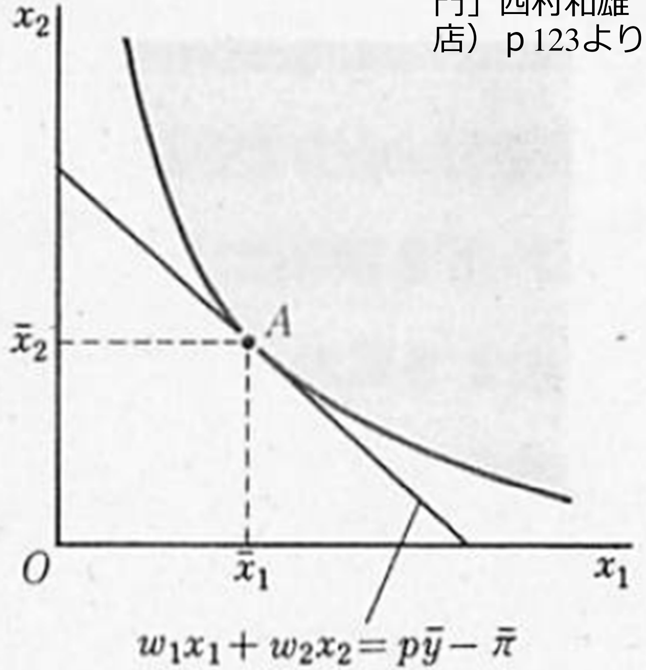
本章は、「ミクロ経済学入門」西村和雄（岩波書店）

をベースにしている。

費用面から企業行動を考える。
利潤最大化と費用最小化は表と裏。



（i）$\bar{y}$ の高さで等利潤平面と生産曲面を切る



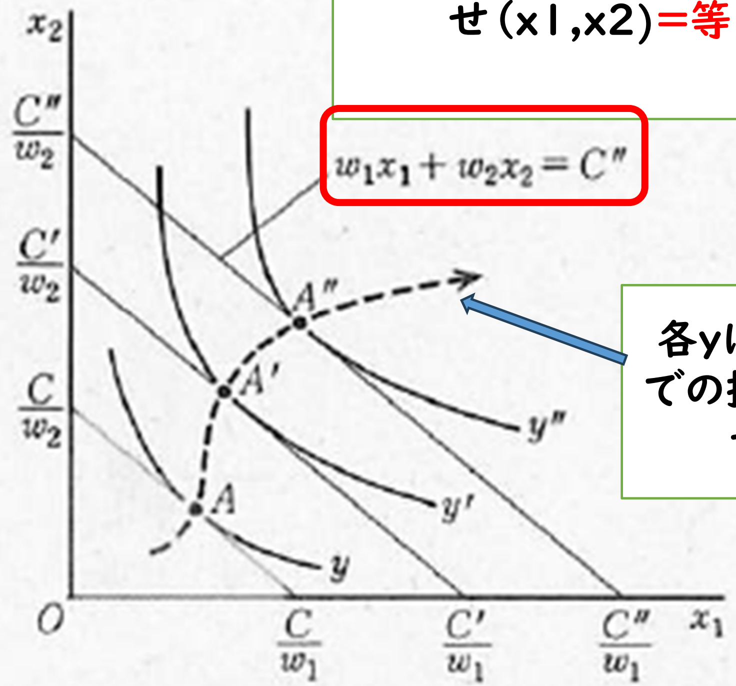
（ii）$RTS = \frac{w_1}{w_2}$

出所：「ミクロ経済学入門」西村和雄（岩波書店） p 123より抜粋

Yを作るための費用総額Cが、費用関数

つまり、yを作るために必要な費用
w1x1+w2x2=C
のうち、あるy＊を作るために最小となる費用C＊が決まるので、それを
C＊=c（y＊）
とあらわすことができる。
このc(y)の関数を、**費用関数**という。
（右図における、拡張経路におけるCとyの関係に当たる）

費用がC＊で一定となる組み合わせ（x1,x2）=**等費用線**



各yに対する最小費用での投入量の組み合わせ=**拡張経路**

出所：　「ミクロ経済学入門」西村和雄（岩波書店）ｐ121より抜粋

費用関数を考えるメリット

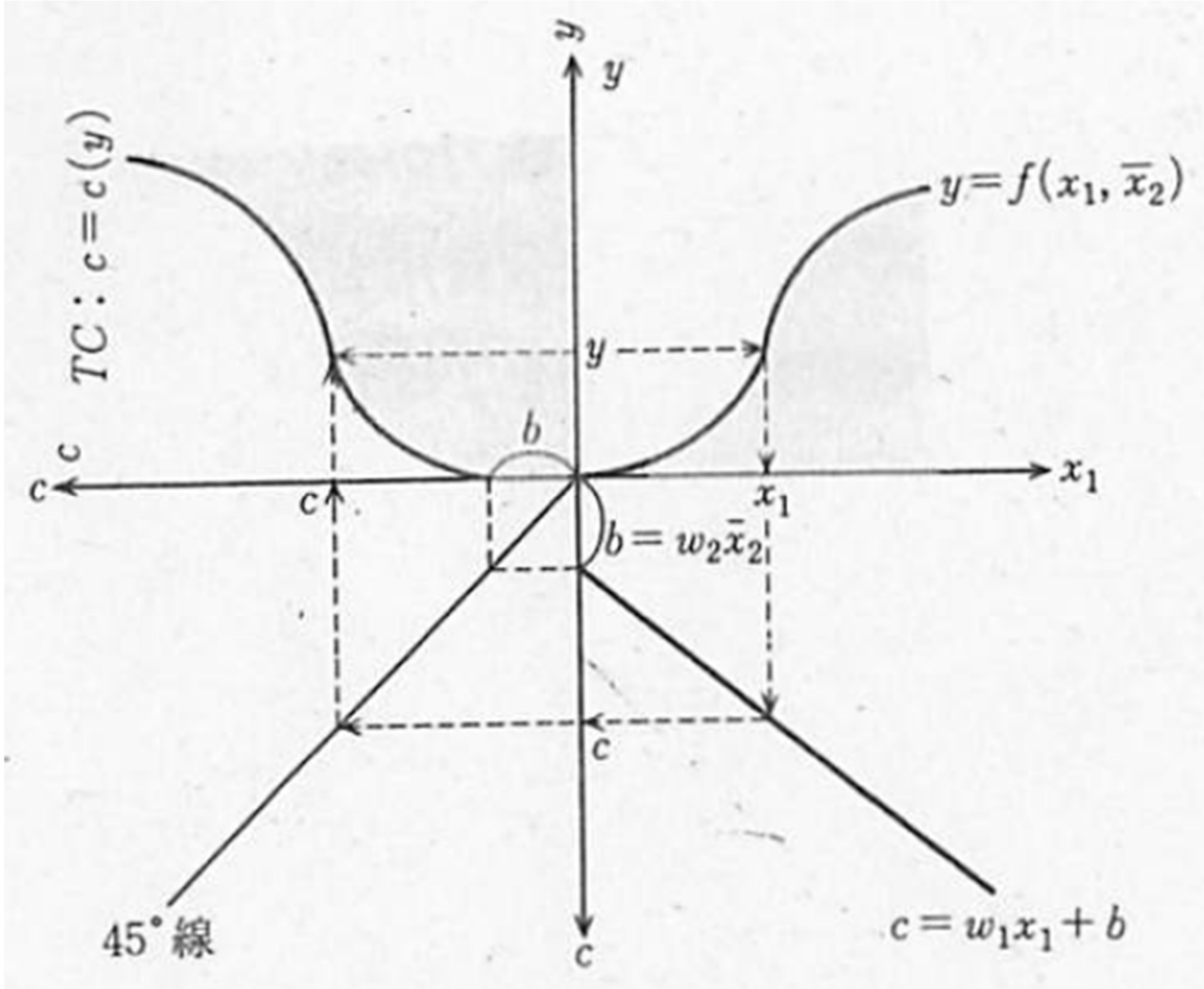
- =>費用最小化の議論が埋め込まれている。
- =>xの財の種類の数に関係なく、yの選択のみを問題とできる。
- 投入が複数ある場合は、　生産Y=y（投入x1, x2 , x3, x4, ・・・・）
- =>図に表せない。
- 費用関数　C=c(y)
- 利潤π=py－c（y）
- Yとπの関係を2次元グラフで書くことが可能！
-
-

4

可変費用と固定費用

- 総費用（2財の場合）： $w_1x_1+w_2x_2$
-
- 短期において第2財は、変更が不可能 $x_2=\bar{x}_2$ とする：事例は？
- このとき、第2財は、固定的生産要素と呼ぶ
- このとき、 $w_2\bar{x}_2$ が、固定費用（Fixed Cost：FC）となる。

- 一方で、第1財は変更可能。
- このとき、第1財は、可変的生産要素と呼ぶ
- このとき、 w_1x_1 が、可変（変動）費用（Variable Cost：VC）となる。
- **総費用TC（Total Cost）＝固定費用FC＋変動費用VC**



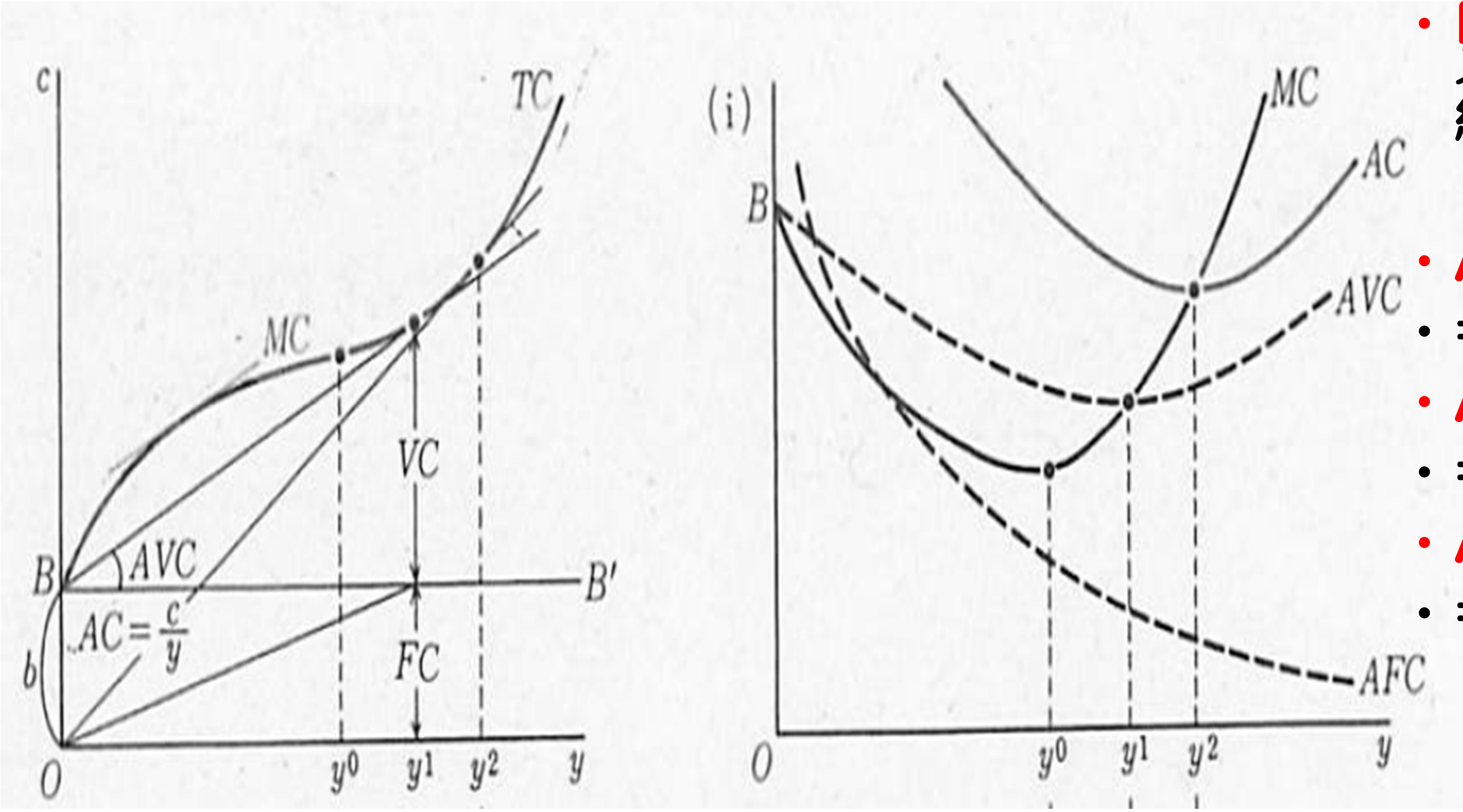
出所：　　「ミクロ経済学入門」西村和雄（岩波書店）ｐ１４６より抜粋

- **短期費用曲線の導出**
- **（変動するINPUTは一つ、OUTPUTも一つの場合）**

- **生産関数**

  $y=f(x_1)$
- **INPUTとコストの関係**
- **$C=w_1x_1+b$**
- **<bは固定費用>**
- **合体させると、yとCの関係が出る。**
- **$C=c(y)$**

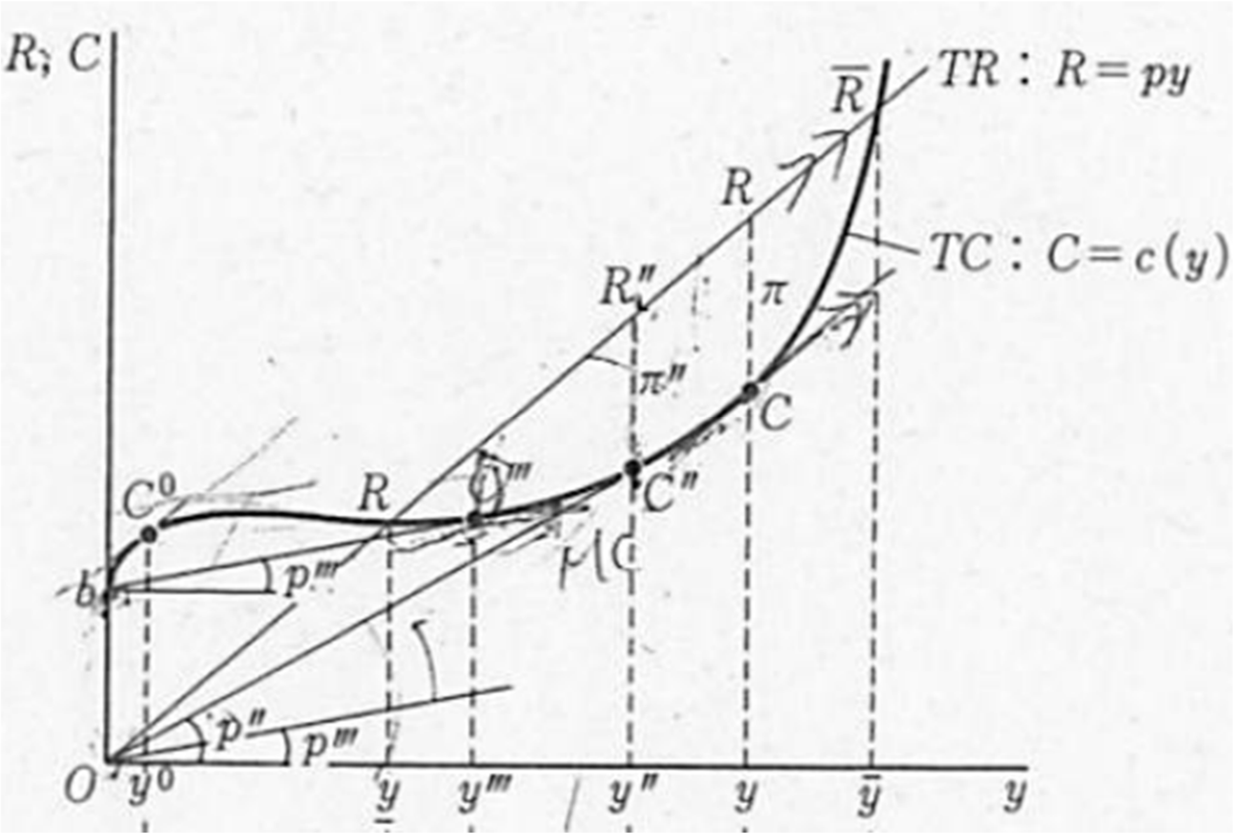
限界費用と平均費用



出所：　　「ミクロ経済学入門」西村和雄（岩波書店） p 147より抜粋

- TC:総費用
- MC:限界費用（限界的な費用増分）＝総費用曲線の傾き
- AC:平均費用
- ＝TC総費用／y
- AFC:平均固定費用
- ＝FC固定費用/y
- AVC:平均可変費用
- ＝VC可変費用/y

短期の利潤最大化



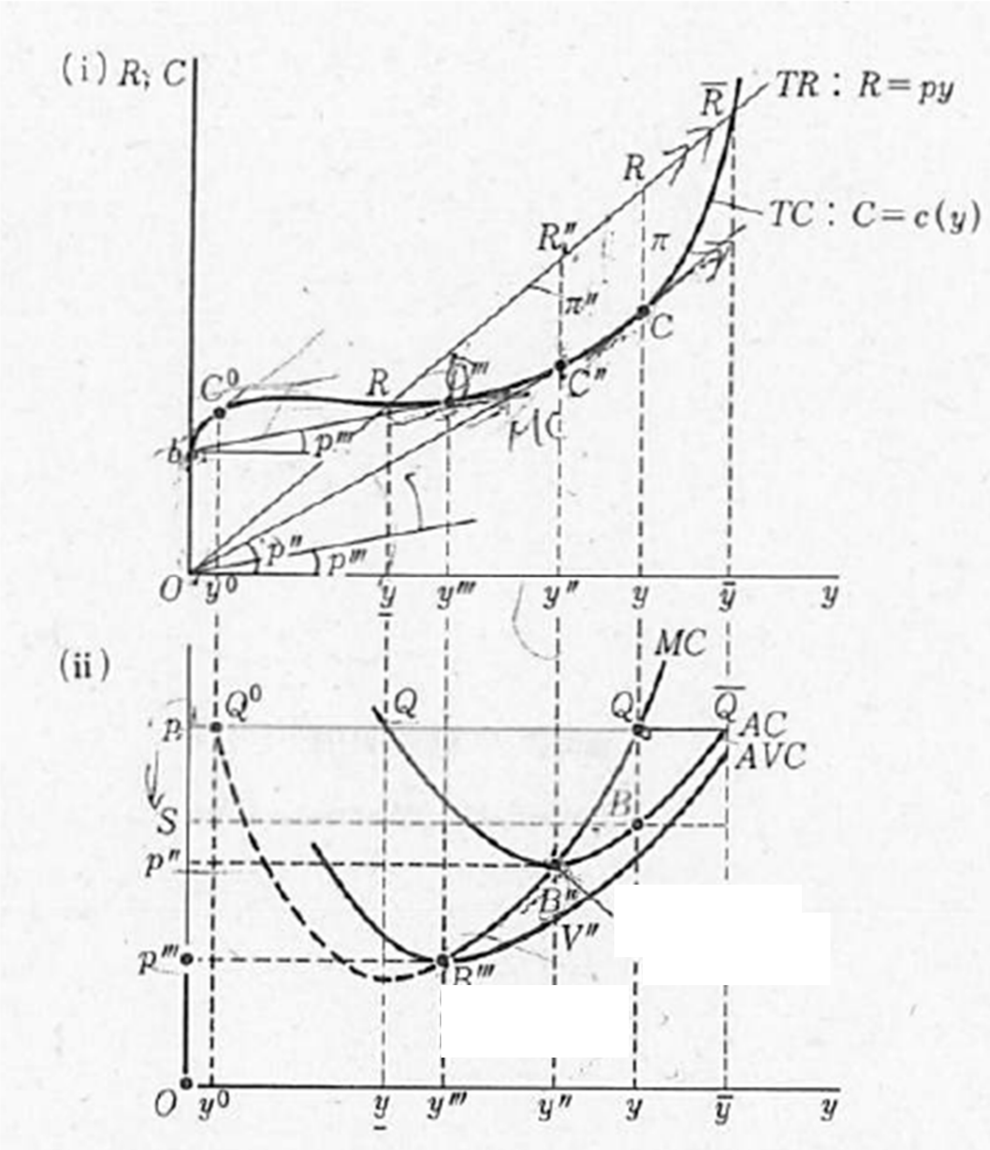
出所：　　「ミクロ経済学入門」西村和雄（岩波書店） p 157より抜粋

- π（利潤）
- ＝TR（総収入）ーTC（総費用）
- ＝py-c(y)

- 利潤最大化
- ＝>利潤が最大となるyを選ぶ

- MR＝p＝MC
- MR（限界収入）
- MC（限界費用）

- **Pが変わるとyはどうなる？**



供給関数

- pが与えられるとき、利潤を最大にするyは、

p＝MCとなる点で決まる。

- つまり、生産量（供給量）yとpの関係は、MCの線となる。

- MCの線＝＞供給関数

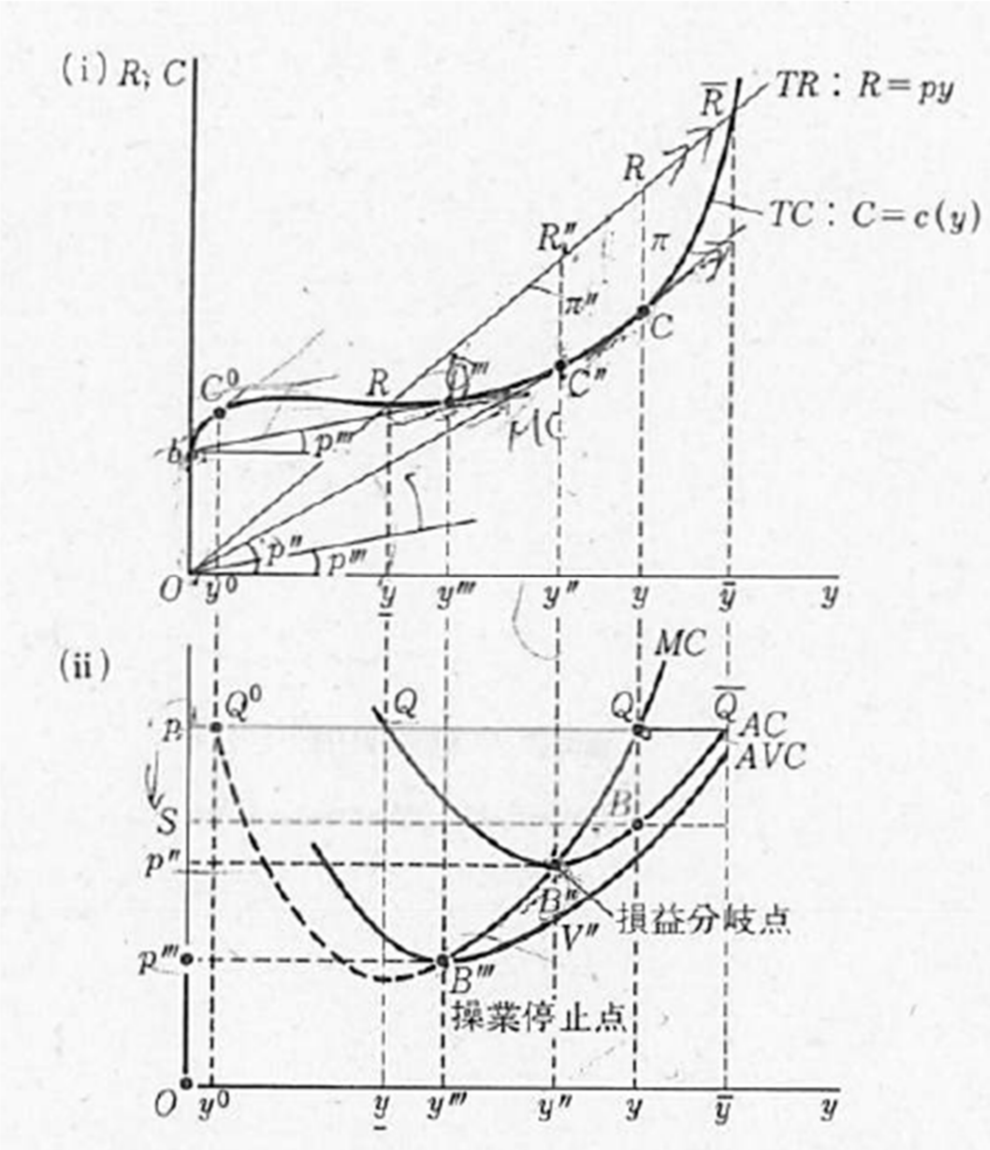
9

短期の利潤最大化
供給関数の数値計算例

- π（利潤）
- ＝TR（総収入）ーTC（総費用）
- ＝py-c(y)

- ここで、C(y)=(1/4)y^2+6とする
- 利潤最大化
- =>利潤が最大となるyを選ぶ
- dπ／d y ＝０とおくと、

- P−(1/2)y＝０
- Ｐ＝(1/2)y＜＝供給関数に対応



損益分岐（πの正負）のポイント

・ π＝0となるのは、

・TR=TC

・→p=TR/y=TC/y=AC

・→p=AC

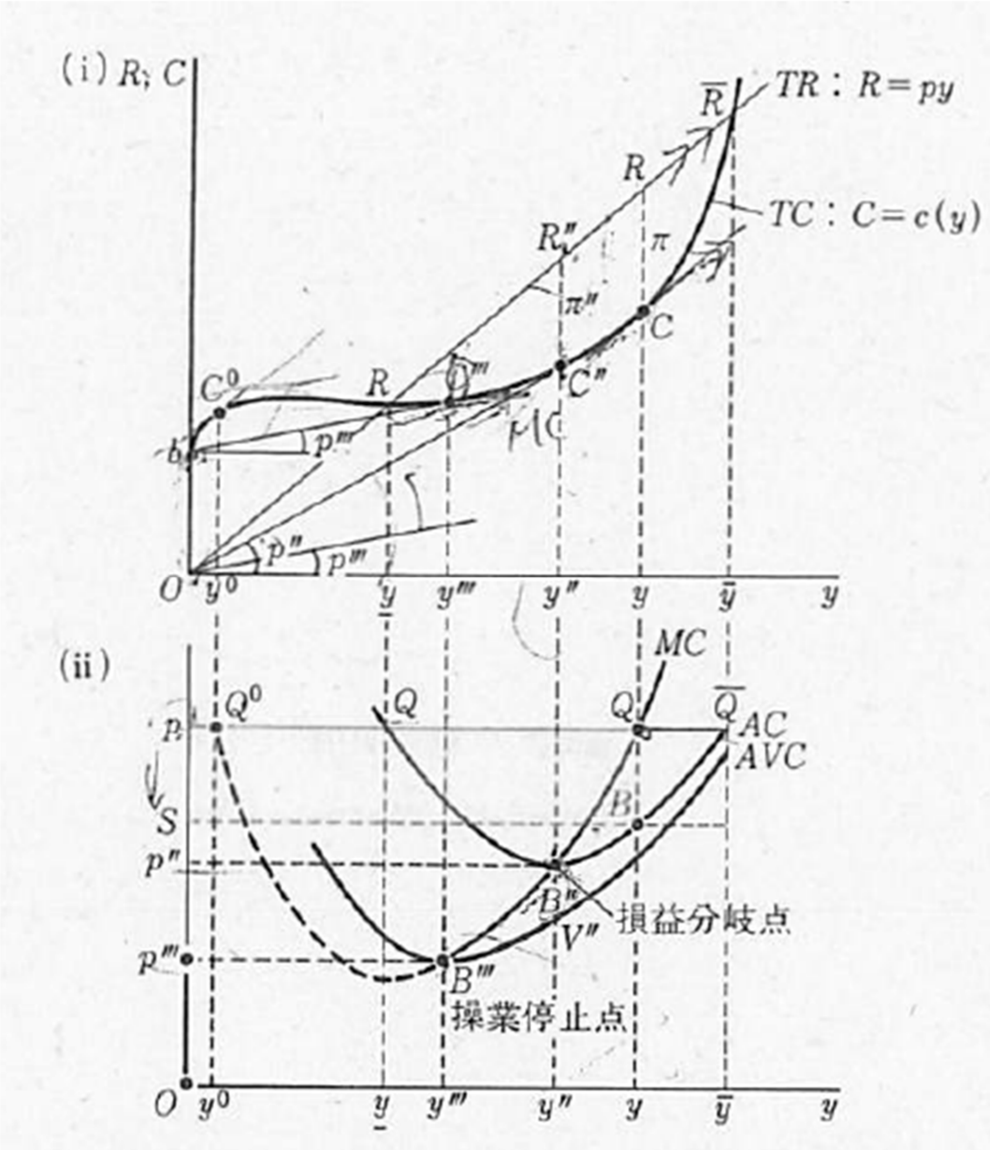
・一方で、

・利潤最大化のyは

p=MCを満たす。

→p=MC>ACであれば、π>0

→p=MC<ACであれば、π<0



操業停止の判断

- 操業停止でも、bは発生
- 操業することで$-b<\pi<0$となるのであれば、操業したほうが良い。
- $\pi=0$となるのは、
- →TR/y=（VC+FC）／y
- →p=AVC+AFC
- 利潤最大化のyは
  p=MCを満たす。

→p=MC>AVCであれば、$-b<\pi<0$
→ **操業が望ましい**

→p=MC<AVCであれば、$\pi<-b<0$
→ **操業停止が望ましい**

12

まとめ：重要語

- 費用関数
- 固定的生産要素と固定費用
- 可変的生産要素と可変費用
- 短期費用曲線と長期費用曲線
- 総費用TC＝固定費用FC＋可変費用VC、
- 限界費用MC
- 平均費用AC＝平均固定費用AFC＋平均可変費用AVC
- 供給関数（利潤最大化条件P＝MCから決まる）
- 損益分岐（p＝AC）、操業停止（p＝AVC）